

古代の尾張氏について

注

- (1)太田亮『姓氏家系大辞典』
- (2)高群逸枝『母系制の研究』
- (3)重松明久「尾張氏と間敷屯倉」（『日本歴史』 184）
- (4)新井喜久夫「古代の尾張氏について（上）」（『信濃』 21の1）
- (5)松前健「尾張氏の系譜と天照御魂神」（『日本書紀研究』 第5冊）
- (6)『古事記』では天火明命、『書紀』では火明命・天火明命・天照國照彦火明命、『旧事紀』では天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊という。
- (7)服部良男「ミヤズヒメ伝承成立に関する一試論」（『びぞん』 3）
- (8)尾張氏で尾張国の郡司になったものは、尾張宿祢乎己志ら 11 名を数える。
- (9) 太田亮『日本国誌資料叢書・尾張』
- (10)氷上姉子神社は名古屋市南部（緑区）にある。
- (11)新井喜久夫「前掲論文」
- (12)澄田正一「尾張と熱田神宮」（『古代の日本』 巻6）
- (13)重松明久「前掲論文」
- (14)原島礼二『倭の五王とその前後』 247 頁
- (15)継体天皇は尾張氏の女を娶して安閑・宣化両天皇をもうけており、継体と尾張氏には何らかの関係があったはずである。（継体の妃として『古事記』では「尾張連等の祖、凡連之妹、目子郎女」と、『書紀』では「尾張連草香女曰目子媛」と記されている。）
- (16)原島礼二『前掲書』 232～234 頁
- (17)尾張氏が内廷と深い関係にあると考えておられるのは、新井氏・原島氏らである。
- (18)貝塚の分布などからこのように考えられている。
- (19)海部との関係は新井氏・原島氏のほかにも多くの研究者が指摘しているところであるが、（後藤四郎「海部直の系譜について」『日本歴史』 329・その他）尾張氏と同族が分布するからといって単純に拡大解釈をしている。
- (20)岸俊男「紀氏に関する一試考」（『日本古代政治史研究』）
- (21)服部良男「尾張連始祖系譜成立に関する一試論」（『日本歴史』 307）
- (22)新井喜久夫「前掲論文（下）」
- (23)前川明久「熱田社の起源について」（『法政史学』 15）
- (24)直木孝次郎・他『伊勢神宮』 22～23 頁
- (25)『古事記』に倭建命、『書紀』に日本武尊とあることから仮名で示した。
- (26)(25)と同じ趣旨。『古事記』に美夜受比賣、『書紀』に宮簀媛、『熱田縁記』に宮酢媛とある。

- (27)上田正昭「国県制の実態とその本質（『日本古代国家成立史の研究』）」
- (28)(25)と同じ趣旨。『古事記』に須佐之男命『書紀』に素戔鳴尊とある。
- (29)(25)と同じ趣旨。『古事記』に倭比賣命『書紀』に倭姫命とある。
- (30)田中卓「不破の関をめぐる古代氏族の動向（下）」（『神道史研究』6巻5号）
- (31)天智7年に僧道行が熱田神宮から盗んだ草薙剣を取り返し、宮中においたとするが異説もある。
- (32)『書紀』宝字元年12月条・『続日本紀』霊龜2年4月条を参照。
- (33)『続日本紀』宝字2年4月条参照。
- (34)『書紀』においては用字整理が進み、ヤマトタケルのように次の天皇の座を約束されている人物には「命」ではなく「尊」が使われている。尚、ヤマトタケルについては、西郷信綱「ヤマトタケルの物語」（『文学』37-11）を参考にした。
- (35)『旧事紀』「天孫本紀」の尾張氏系譜にはミヤズヒメが記されていないのは不思議である。
- (36)仁徳は母方系譜によっても景行につながる。景行→五百木入日子→品陀真若王→中比売→仁徳と続くのであり、品陀真若王の母は尾張連等の祖建伊那陀宿祢の女志理都紀斗女である。また、五百木入日子の母である八坂入日賣命の祖母は、崇神妃大海部姫（尾張氏）である。
- (37)阿部寛子「古事記と尾張氏」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』第27集1分冊）によれば、『古事記』には後宮ということばやその場を示す表現すらみあたらないことから、『古事記』は後宮でつくられたとされた。そして、継体妃目子媛の力によって尾張氏の多くの后妃伝承が作為されたとする。
- (38)直木孝次郎「物部連に関する二、三の考察」（『日本書紀研究』第2冊）
- (39)本位田菊士「物部氏・物部の基盤についての試論」（『ヒストリア』71）
- (40)新井喜久夫「前掲論文（上）」
- (41)尾張を名乗る豪族の分布は、東国では近江・越前・美濃・飛騨・伊勢である。また、『和名抄』によれば信濃と上野に尾張郷がある。

（補足）

田中巽氏は「類似銅鐸と尾張氏」（『神戸商船大学紀要・文科論集』15）という論文で、銅鐸の使用者を尾張氏と結論づけているが、論拠は尾張氏と銅鐸の分布がだいたい一致するということであり、同族を多数もつ尾張氏がたまたま一致したのではないかとも思われたので本文では取り上げなかった。

究は今後の課題である。